古都保存行政の全国展開　（プレゼンテーション要旨）　　０６・０４・０５

財団法人大原美術館理事長
倉敷商工会議所会頭
大原謙一郎

1）古都保存のコンセプト

「古都」とは、旧来の権力の中心であった「権力首都」や城下町、代官所所在地だけでなく、商都、農工漁業都市、文化都市、宗教都市等を広く包含するのが好ましい

「保存」とは、現状を塩漬けにすることでなく、活かすことと考えたい。「古都の剥製」を作ることを主眼としてはならない

首都人的視点から「心のふるさと」を守るだけでなく、地方人の視点で「生活の現場」としての街のあり方を大切にする姿勢を持ちたい

2）古都保存を担う主体について

「お上社会」を前提とせず、官庁や行政と民間（企業、NPO、個人等）とのバランスを、シビル社会的観点で、地域特性に応じ臨機応変に考えることが好ましい

その場合、「シビルマインドを持つ行政」と「公共マインドを持つ民間」を育て、両者の協働関係を作り上げることが成功のカギだと思われる

3）古都保存の法制と運用と実現の条件

法制度の充実だけでなく、それを実現する機構あるいは組織の人事、運営、経営のあり方と、活動のクオリティーの確保が重要な課題となる

具体的には、志高く自由度の広い「ガバナンス」と、理にかなった「ファイナンス」の基盤を作ることができるか否かがカギとなる

美しい景観は、美しい生活によって守られる。全国各地の古都の地元が美しい生活を楽しめる心理的および経済的余裕を持ってはじめて、古都は守られる

参考文献　『倉敷からはこう見える———世界と地方と文化について———』
大原謙一郎著　山陽新聞社刊

時流自論

opinion@news project

小さな町村顧みぬこの国

大原 謙一郎

おおはら・けんいちろう 40年生まれ。岡山県倉敷市の財団法人大原美術館理事長。倉敷商工会議所会頭。

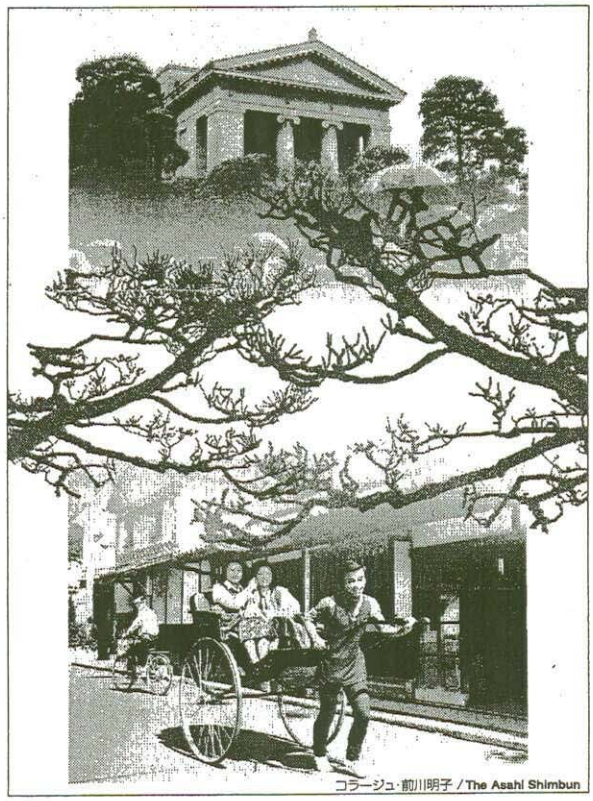
私は神戸生まれ京都育ちの倉敷人である。東京、アメリカ、関西と住まいを移し、今、瀬戸内の町倉敷の中心部にある江戸時代中期に建てられた商家に本拠を構えている。

住んでみて、首都を遠く離れた地に、この個性的な町が存在する意味は大きいと実感している。と同時に、この国にとって大切な意味を持つ町や村が、倉敷以外にも全国各地に広く分布していることにも改めて気付かされる。東京、大阪などの巨大都市よりむしろ、これらの小さな町村の行く末こそが、私たちの国の価値と風格を大きく左右すると感じられる。

倉敷は江戸時代の町並みを慎重に保存しているちょっと気位の高い町である。ここでは、江戸時代以来、天領の自由闊達な雰囲気のもとで文化を尊ぶ気風が自然に育っていた。

明治以降は繊維産業をはじめいくつかの事業が誕生し、文化的土壌と事業で蓄積された富とが結び付いて、美術館や医療福祉機関などの公益的な事業が民間のイニシアチブにより相次いで生まれた。これらを目当てに世界からこの地を訪れる人たちは後を絶たない。倉敷は、歴史を大事にし、文化を尊ぶ町であるがゆえに、世界とあたたかいきずなで結ばれている。

もとよりこのように世界とつながる力のある町は倉敷だけでない。日本の文化首都である京都や奈良は別格として、私の住む山陽、山陰道周辺だけでも、文学都市尾道や歴史の香り高い萩・津和野、大内文化の花開いた山口や出雲文化の故郷松江など、豊かな蓄積を誇る美しい町々がきら星のように並んでいる。さらに東に進むと金沢、高岡、松本、小布施など、かぐわしい文化と歴史を誇る大切な町は目白押しである。



コラージュ・前川明子／The Asahi Shimbun

ほかにも、縄文時代につながる文化遺産を地道に守っている町がある。地域の生んだ工芸技術や芸能を伝える町もある。世界につながる現代的イベントを催している町、新しい事業を生みだしている町など、日本の地方は、いろんな意味で大切な町や村の宝庫である。

これらの町や村の存在自体が意義深いが、同時に、その姿を世界に紹介し、その一つ一つで日本と世界の良質な出会いを実現させることが、とても大切だと私は感じている。この国が、自国の独立と安全を、軍事力よりむしろ文化的共感と世界平和への貢献とによって支えることを国是とする国である以上、このような出会いは、単なる気分の問題を超えた切実な意味を持っているからである。

第2次大戦のとき、倉敷はそのことを身をもって知った。当時の倉敷は水島の軍需基地に隣接し、市内にも軍需工場を抱える戦時産業の拠点だった。それにもかかわらず、この町は空襲を免れた。これは、京都や奈良の場合と同様、大原美術館などの文化遺産に対する連合国側の配慮のためだったようだ。32年、当時の国際連盟が日本の国情を探るために派遣したリットン調査団の一行が、欧米を含め世界の美術品を擁する美術館がここにあり、これを市民が温かく受け入れていることを知って好感を持ったと伝えられていることも、その証左とされる。

今、そういう体験を踏まえ、日本各地の町や村を舞台に世界との文化的共感を積み上げることは日本の将来のために貴重なことである。これらの小さな町や村が今後も堂々と独自の歴史を刻み、それを世界にアピールし続けることが出来るかどうかに、この国の未来がかかっているときえ、感じられる。

しかし、今の為政者の視線は首都周辺にしか向けられておらず、これらの町や村のことが彼らの意識に浮かぶことはほとんどないようだ。それどころか、これらの町や村にとっては迷惑な政策が首都だけの都合で無神経に施行されてしまうことも少なくない。

地方に最も関係の深い地方分権を巡ってさえ、地方の自立と再生よりも首都の負担軽減を眼目とする議論が少なくない。公共投資や税財源移譲についても、首都周辺の内輪の事情の前に地方の市民の生活が置き去りにされるケースが多い。

「国政」に携わるはずの日本の政府は、残念なことに、地方を顧みずに首都圏、言い換えれば関東圏の繁栄を図る「関東政権」の体質を色濃く持ってしまったようだ。

その結果、富と人材の関東圏への移動が着実に進行し、地方の民が危惧していた「日本の疲弊と首都の繁栄」という図式が現実化しつつある。その中で、日本にとって大切な町や村の多くが財政危機の瀬戸際にあえぎ、全国に散らばる美しい町村では市民の生活が破綻の危機に瀕している。このままでは、この国の姿はゆがんでしまう。

先日の総選挙では、近畿2府4県の小選挙区と比例区の議席数で政権党である自民党が第一党の座から滑り落ち、野党の民主党が第一党になった。注目すべき異変である。関西はすでに「関東政権」を見限ってしまったのかもしれない。この次には、関東以外の日本が束になって、関東色を濃くする政権に異議をとなえる日が来ることも予想される。

総選挙後の政権が、全国に散らばる小さな町や村への目配りを取り戻すように、地方の視点から監視を続けたい、と思う。

時流自論

opinion news project

文化の独立・尊厳守ろう

大原 謙一郎

おおはら・けんいちろう 40年生まれ。岡山県倉敷市の財団法人大原美術館理事長、倉敷商工会議所会頭。

文化は芸術や文学、芸能、学問研究などを通じて人の心を豊かにし、生活に張りと潤いをもたらす。しかし、この世紀に文化はその潜在能力を生かして、もっと広い範囲で汗を流して働くことが求められると多くの人が考え始めている。その働き方には四つばかりのパターンがあるようだ。

まず、大上段に振りかぶるようだが、文化は異民族や国家間の和解と融和のために働く。このことがどんなに大切か、逆に和解と融和ができないとき、どのような悲惨と不正義が世界に蔓延するか、私たちはこれまでに思い知らされた。そして、経済や外交や軍事力だけでは対応できない課題がいかに重く大きいかも実感させられた。世界各地で文化が融和と和解のために積極的に働かなければ、地球は人類にとってますます居心地の悪い星になってしまいかねない。

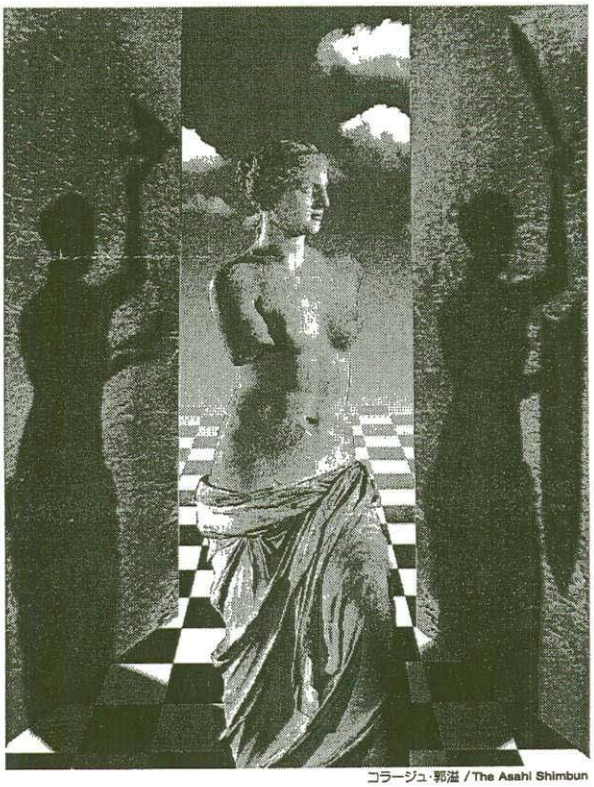
第二に、文化は国の風格と安全を守るために働く。民族と国家の融和と和解がどんなに進んでも、この星には、平和と譲り合いの理想郷とは程遠い状態がまだまだ続くに違いない。その中で、日本が風格ある国として認知され、平和と友好のサークルの中の有力な一員として安全に心地よく存在し続けるためには、経済力や同盟関係に頼るだけでなく、この国の文化的な底力を総動員する必要があると思われる。

第三に、文化は新しい事業創出への貢献を通じ、本当の意味での日本再生のカギを握る。現に、今の日本を支えている事業の創出には、首都を離れた地方の文化的蓄積が大きな力を発揮してきた。このことは最近徐々に認識され始めている。事業創出の原動力は、各地の歴史と風土に磨かれた知恵と感性だった。これからも、日本を支える新しい事業群を生み出すために全国各地の文化の力にかけられる期待は大きい。

そして、最後に最も身近なところだが、文化が観光資源として経済面でも貢献するよう期待する向きも少なくないようだ。例えば、ロンドンのテートギャラリーが新たに開館した美術館「テートモダン」は、発電所の建物を転用し、現代美術を斬新な方法で展示して人気を呼んでいる。人が集まるだけでなく、周辺に美術関連の産業が集積して大きな経済効果も生んだ。「テートモダン効果」という新語まで生まれたことが、観光関係者の間で話題になった。

以上の点について私自身も同じ意見であり、美術館の経営者として、文化にいろいろの役割を担わせるお手伝いをする覚悟は出来ている。しかし、本当にそれでいいのかと首をかしげる方もおられるだろう。

なぜなら、文化はそれ自体が価値をもつものだからである。文化には侵してはならない自由と尊厳がある。それを、国や企業や権力者の都合でねじ曲げることは、決して許されてはならない。これを忘れたとき、文化も国も滅びへの道を歩み始める。



コラージュ・郭滋 / The Asahi Shimbun

それを実証したのが、ナチスによる「ドイツ芸術」の振興だった。若い頃、画家をめざして挫折したヒトラーは、とりわけ美術の分野に圧力をかけ、ゲルマン的に健全で善良とされる作家や作品に「ドイツ芸術」のお墨付きを与えて褒めそやす一方、好みに合わない作品には「退廃芸術」の烙印を押して圧迫した。音楽や文学や舞台芸術などの分野でも同じようなことが行われた。これがどんなに国の文化的創造力を殺いだか、そして、どんなに周辺国からの視線を厳しいものにしたか、そのマイナスは計り知れない。

似たような失敗は他の国にも見られる。旧ソ連の「社会主義リアリズム」運動は自国だけではなく、東欧諸国にも暗い影を落とした。逆に、ソ連サイドから浴びせられた「西側の文化は資本家に奉仕している」という非難も全く的外れではなかった。日本も、文化の伝統をゆがめて利用した軍国主義の流れと、終戦の日を境に今度は伝統を敵視した占領政策の中で、文化史上の問題点を残している。

この難しい世紀、文化は日本と世界のために広く貢献する必要がある。しかし、これを都合よく解釈し、例えば「お上」や企業に貢献するような「役に立つ」文化を育成するために圧力をかけたりすることは、文化の尊厳を損ない、決していい結果を生まない。

文化は時として毒を含み、社会や人間の暗い部分をえぐり出す。権力者や社会の強者にとって都合の悪いこともあるだろう。しかし、そのような文化の自由を尊重しその尊厳を認めることで、国の誇れと風格は高まる。現に、いま話題の映画「華氏911」にしても、現政権とイラク戦争を告発する姿勢は権力者にとっては面白くないだろうし、その内容にも賛否両論だろうが、それが堂々と上映され人々が自由に観覧している姿を見て、今のアメリカにも健全なものが残っていると安堵している人は少なくないだろう。

私自身、大原美術館という文化的ツールを総動員して、日本のため、ひいては世界のために汗を流して働くことはいとわない。そして、その中で、私たちの流す汗が健全なものであり続けるために、文化の独立と尊厳を守る気配りを怠ってはならないと常に自戒の念を新たにし続けたいと思う。